

ライシテへのさまざまなアプローチ 研究動向の一断面

上智大学 伊達聖伸

政教関係のみならず広く人権保障にかかわりうる概念であり、近年ではフランスのナショナル・アイデンティティとして再定位される一方、政教関係や人権問題の国際比較のツールにもなりつつある「ライシテ」。日本語ではこれまで「非宗教性」「世俗主義」「政教分離」などの訳語があてられてきたが、近ごろでは「ライシテ」のカタカナ表記も一時期よりは増えてきたように思われる。

実際、ライシテにはさまざまな側面があり、歴史のなかでもその内実や意味は変化しているため、一義的に定義することは難しい。要素的な定義によっても、いつでもこれで十分であるとは言いにくいところがある。

もうひとつ確認しておきたいのは、ライシテに歴史があるように、ライシテ研究にも歴史があるということだ。ライシテが多義的であるように、ライシテへのアプローチもさまざまである。それは、しばしば研究者の「立場性」をあぶりだすことにもなっている。

本発表では、ライシテ研究の歴史を振り返り、現代のライシテ研究の地平を確認したうえで、発表者が訳者としてかかわった次の3冊の本の著者を中心に上げ、彼らのライシテ理解の特徴を取り出し、共通点と相違点を明らかにしながら、現代のライシテ研究の動向の一断面を提示したい。

ジャン・ボベロ『フランスにおける脱宗教性（ライシテ）の歴史』白水社、2009年（三浦信孝との共訳）

マルセル・ゴーシェ『民主主義と宗教』トランスビュー、2010年（藤田尚志との共訳）

ルネ・レモン『政教分離を問いなおす』青土社、2010年（工藤庸子との共訳・解説）

なお、これは取り上げる本の著者たちの特徴でもあると思われるが、私自身のアプローチも、法学プロパーというものではなく、思想史・文化史・社会史に近いものであることを、あらかじめお断りしておきたい。